

R. ムシルの新 Edition について

加 藤 二 郎

A. Frisé 編集のムシル全集三巻のうち、第一巻 “Der Mann ohne Eigenschaften” (1952 年版) は 60 年に改版されてその後も続いているが、第二巻 “Tagebücher, Aphorismen, Essays und Reden” (1955 年初版) と第三巻 “Prosa, Dramen, späte Briefe” (1957 年初版) は絶版となって今日に至っている。第一巻は別の編集方式による新版が、また第二・第三巻については完全な形による刊行が予定されていたが、第二巻のうち “Tagebücher” (日記) の部分のみが 13 年の年月を経て、装いを新たにしてこの秋以後発刊の運びとなった。

新版の『日記』は、多くの指示事項のため複雑な形になるらしいが、二巻に分かれて、分量は 2000 ページほどになるらしい。編者は旧版同様に Frisé である。彼の言葉によれば、『日記』は「それが書かれたままの形で印刷されている。本文について言わねばならぬことは、すべて資料表に収めてある。本文中にはムシルが削除したものも入れてある。」旧版の日記に不満を抱いていた読者が注目してもよい点は、「抜粋を元の個所に戻し、そして伝記的情報を提供する部分を優先的に収録した」というところだろう。第二巻の Frisé の序文によれば、「ここに発表された 530 ページの『日記』の部分には、ほぼ二倍の分量からなる日記類から抜粋したもので

ある。」それゆえ Frisé が当時目を通した日記類の遺稿は、1000 ページ程度のものであった。だが新版は、その 2 倍の 2000 ページの分量になるという。第三巻の「付録」に「日記の補遺」として、100 ページ程度のものである。だがそれを除いても、その後発見された日記類の遺稿がかなり多数あったことになる。Corino の報告するところによれば、ムシルの遺族¹⁾の一人である Marcovaldi が、ムシルの死後 25 年たった今になって、手紙の草稿の大きな束を取り出してきたという。「Frisé はこれを全部『日記』の付録に入れた。」これを見ると、『日記』とはいっても、手紙の草稿類も日記の一部とみなして収録しているために、このような分量になったのかもしれない。手紙のことで、Corino の話を続ければ、意外にも「ムシルは比較的手紙を多く書いた作家」で、約 600 通の手紙と手紙の草稿が、Corino²⁾によってすでに集められているという。

旧版で日記が抜粋形式になったのは、当時の出版事情によるものだろうし、旧版のお蔭を受けたものとしては、これに難癖をつけないわれもない。だが日記とは前後の脈絡から楽しんで読むものだと思っているものには、これは細切れるうま味に欠けていた。それゆえ抜粋が元に戻されるのは有難い。だがムシルの思考は日常的具体的なものを対象とす

るよりも、むしろ好んで抽象論理的傾向をとりやすいので、日記が復元されても、ムシルの生の生活像、人間像がどれほど汲みとれるようになるか、うま味が増すかどうかはあまり期待できないのではあるまいか。だが、伝記的情報を提供する部分を優先するということは、抽象論理的な部分よりも具体的部分を優先する意味であろうから、この点からすれば、新版は楽しく読めるようになるかもしれない。

上に引用した Frisé と Corino の言葉は、昨年(2012)の5月27～29日に Saarbrücken 大学のムシル研究センター³⁾で行なわれた「R. ムシル研究の諸問題を討議する国際会議の資料集」⁴⁾なるものによったものである。この小冊子中、討議の記録はメモ風なもので、それゆえ討議の模様はかならずしも細かな点まで読みとることはできない。だが、討論がムシルの遺稿をも含めたものの新しい編集とその刊行を中心としていること、そして特に『特性のない男』の遺稿部分の編集をめぐる、かなりもつれた論議が展開されていることが分かる。

1973年までのいきさつ：Friséの話によれば、『特性のない男』の新版については、1963年9月以降すでに話題となっていた。そしてその *historische-kritische Ausgabe* (原典批判版、以後 HKA と記す)を出す議論も当時なされ、それには Bausinger を参加させる予定になっていた。ちなみに、Bausinger が Beißner の精神に則り『特性のない男』の遺稿部分の HKA の研究を、学位論文として Tübingen 大学に提出したのは1961年、それが Rowohlt 社から出版されたのは64年である。だが64年春には、*Leseausgabe* (読みやすい普及版、以下 LA と記す)に話が集中することとなり、編集者

Frisé は Rasch を、編集者 Kaiser 夫妻は Bausinger を顧問にした。ムシルの遺族たちが、HKA ではなく LA を希望したのだそう。いろいろ曲折を経たのちに、同年10月に Frisé と Kaiser 夫妻は顧問を交えずに Rom で相会することとなり、67年には「作業計画書」で意見の一致をみて、ムシルの版權いっさいの所有者である出版社 Rowohlt と遺族たちと協議したすえ、『特性のない男』の新版には三人が名を連ねることに決まった。この間に、Bausinger は自動車事故で惜しくも亡くなっている。Frisé の言葉によれば、この67年が Kaiser 夫妻による『特性のない男』の仕事始めの年であった。だが E. Kaiser は病氣となり、すこしばかりの仕事を Frisé に送った程度で三年後亡くなった。かくして、Frisé の『特性のない男』の欠陥を指摘して、それが HKA の形であれ LA の形であれ、その新編集を強く主張した貴重な二人のムシル研究家は世を去り、老 Frisé 氏と Kaiser 夫人とが残ることとなった。Kaiser 夫人 Wilkins 女史は、Rom にあったムシルの遺稿を長年にわたり夫とともに研究して、今では『特性のない男』の *Chronologie* では右に出るものがない存在である。だが夫に死なれて三年、新版の仕事を続行する意志が、イギリスかアメリカにいる女史にあるのかどうか、今のところ Frisé にも言えない状態にある。

Frisé-Kaiser 共編の新 LA の問題(1): 新 LA の編集方針は双方で署名した「作業計画書」によるもので、その骨子は、「共編者は、この小説が完成されずに残されたこと、現存の遺稿からはいかなる小説の終結も組み立てられえないこと、新版は遺稿の忠実な写しを提供するものでなければならないということで意見の一致をみた」というところにある。

この方針で遺稿を整理編集すれば、戦争で小説が終結するよう遺稿を組み立てた Frisé の現行の LA の方向も、また Kaiser 夫妻が主張した、主人公兄妹の *unio mystica* の状態で小説は終結するという方向も、相殺されることになる。そして遺稿部分の編集の基礎となるものは、1938 年にゲラ刷りのまま残された『特性のない男』の第二巻の継続章であり、終結の意図的な組立てを未然に「閉め出すために」、その章の並べ方は「遺稿の成立の Chronologie によらず、roll back 形式で、すなわち逆 Chronologie 形式でなされること」になるという。つまり、「第 I 部：14 の遺稿の継続章、第 II 部：39～42 章、第 III 部：1938 年 3 月以降に試みられた継続の章、第 IV 部：1932 年と 1938 年の間に成立したもの。」そして全体を大別すれば、「ムシルの最後の 10 年間 1932～42 年に書かれたもの」が先に立ち、『特性のない男』の前身に当たる『『救世者』、『ふたごの妹』時代に属するもの、そして付録（手控えメモ、覚書、晩年の草案）」が後になる。なるほどこうすれば、未完の小説の終結を組み立てることはできないにちがいない。しかし遺稿部分の第 I 部が継続する 14 の章であるならば、これはムシル自身が生前に記した番号通りの 14 章であるにちががなく、したがってその最後の章は第 52 章「ある夏の日のいぶき」となり、ムシルがこの章を途中まで書いて⁵⁾突然亡くなり、小説は未完に終わったということがこれで読者にも読みとれてよいのであるが、一方これは、Kaiser 夫妻が主張した、主人公兄妹の神秘的愛の境地で小説は終わるということと形式的には一致することになり、その後のものは付録になってしまうのではないかというカンگریが起ころぬでもないのである。

そのためであろうか、Frisé の現行の LA

以上に誰もが読めるような編集方法はないと主張し、ただこれにある誤植と読み違えを完全に訂正し、連続する本文と挿入された註とをもっと明瞭に区別することなどによって、その読みやすさがさらに生かされると主張している Arntzen⁶⁾ は、ここで猛然と喰いさがり、新版が Kaiser の Monographie の方向を取らぬという保証はないとして、共編者が交わした作業計画書の全貌を公表せよと再三要望する。だが Frisé は、自分が今していることは代表的な解決方法と思っていると答えている。

Frisé の立場：Arntzen の疑念は共編者の Kaiser にもっばら向けられているが、Frisé の立場に誰も疑念を向けないのはなぜだろうか。というのも、彼は彼の旧版を「訂正しなければならぬ」としながらも、旧来の方針通りで旧版を続行するつもりがあり、しかもその一方では、彼の旧版の編集方法を否定する新 LA の編集をも担当しているのだから。そして「遺稿は收拾のつかない瓦礫の町だ。終結を構成する計画はもはや固持できない」と述懐して、1939 年に Otto Pacht にムシルが語ったという「自分はどうか続けてよいのかもう分からない」という言葉を引き合いに出しているのだから。Frisé のこの二股は明らかに矛盾している。だが彼には答える用意があるのだ。代弁すればこうだろう——自分は遺稿部分を勝手にアレンジして、⁷⁾強引に小説を終結に導いたわけでもないし、またあれは自分の創作でもない。1928 年、Fontana との Interview でムシルが明かした、『特性のない男』の前身である『ふたごの妹』の内容に沿って、自分は遺稿を組み立てたまでであり、これを下敷きにしたのは、たとえ学術的にみれば厳密公正ではなかったにせよ、こうすることにより、年代的にかけ離れた遺稿を

広範囲にわたってそつなく収容することができたばかりでなく、一般読者に読みやすい普及版を提供することにも成功し、したがって出版社の要望する売れる本にすることもできたのである。自分としてはそんなつもりで旧版を出したのだが、編集方針を十二分に説明しなかった欠点——この欠点は、Rasch⁷⁾とArntzenの親切な指摘を受けて分かったことだ——があったために、KaiserやBausingerから反論を受けることになったのだ。こういう事情だし、また『特性のない男』の遺稿は盤根錯節、ムシルすら見通しがつかない状態であったのだから、旧新両LAの編集者となることには、別段矛盾はないのである!?

Frisé-Kaiser 共編の新 LA の問題 (2): 『特性のない男』のための遺稿からは、Frisé が旧版でしているような終結も、Kaiser が伊沢書の遺稿部分の編集で見せているような終結も、ともに見出し(え)ないという共通の認識に立って編集される新 LA の roll back 方式は、両者のかつての意図を相殺することで一步前進して、旧版よりも良心的かつ半原典批判的、半学術的なものとなりえよう。だがこの半のために、読みやすさという点で、新 LA が旧 LA に一段まさるとはぜんぜん言えまい。そのため、新 LA に対する意見はほぼ四つに分れる。

(a) 新 LA の方針に異論は唱えず、Frisé が Kaiser 夫人と話しあって、できるだけ読みやすくなるようにせよという意見(Rasch), (b) 新 LA を認めず、『特性のない男』の編集方法は Frisé の旧 LA の欠点を除去した読みやすい版しかないという意見(Arntzen), (c) Frisé の旧・新版的なものではムシルの創作過程は完全に汲めず、責任のある編集は Bausinger がその端緒を築いた Beißner 方式

の年代的に原典批判した版(historisch-kritische Ausgabe)によるほかはない。「できうるかぎり完全で、しかも historisch-kritisch でないような方法があるであろうか」(Uffhausen⁸⁾) (d) Frisé-Kaiser 共編の新 LA の編集の準備に協力するのが Germanistik の使命であり、遺稿の整理、取捨選別、年代考証などさまざまな問題は、学術的基礎の上でしか解決できない⁹⁾という意見(Roth)。だがこの (d) は新 LA をたてながらも、これを「中間的解決」とみなして、けっきょくは (c) に向かうものであろうから、出版社とムシルの遺族との協議の上で、HKA ではなく LA を出すことに決めている Frisé のいれるところではない。それゆえ Frisé は、共編者の補充を可能としながらも、Kaiser 夫人をたて、三人で始めた仕事を二人にするのはたいへんだから編集員を加えてはどうかと誘われても、諾わないのである。この姿勢では、将来は Frisé 編集の旧 LA の同編者による訂正版と、Frisé-Kaiser 共編の新 LA、そしておそらく Roth を中心として編纂されると思われる HKA の三つが、『特性のない男』をめぐる並び立つものと思われる。

HKA の問題: 国際会議には、Edition の専門家 Göpfert、そして Beißner の原則に従い Hofmannstahl の原典批判版の刊行に従事している Vanhelleputte が参加している。この特にムシル研究とは関係のない両人の出席は、国際会議が HKA 刊行のことを話題にすると予測して始められたことを裏書きしている。それゆえ HKA に表立って反対するものは見当たらないが、ここで問題となったことは二つある。その一つは、HKA には全遺稿を入れるべきか、それとも選択すべきかの問題である。Göpfert は専門家の立場で、HKA は LA とはその目的が根本的に違い、

資料を知るためのものである——それゆえ、HKA では全遺稿をなるべく解釈を加えぬ形で公刊すべきであり、こうしてはじめて解釈の基礎となるものが提供できるのだと主張する。だがこれに対して、ムシルの遺稿に接している Corino や Frisé は、遺稿にはなぐり書き程度のものもあること、草案と完成稿との間の喰い違いがムシルほどはなはだしい作家はいないこと、ムシルの独特な作業方法などをあげて、HKA の場合でも取捨選択が必要であると主張する。調停案として、選択が必要であるならば、その決定は広い土台の上で下さなければならぬという意見が出て、ムシルの遺稿に通じたものと編集出版の専門家との間で問題を練る必要性が説かれ、HKA のための専門家による準備委員会が設けられることになった。

もう一つの問題は Wien のことである。Frisé の報告によれば——Wien でも Saarbrücken と同じような R. ムシル研究のための研究センターが設立され、その目的も同様に遺稿の学術的編集、刊行の準備、国際的研究の協調などであり、Frisé はその委員会のメンバー五人のうちの一人になっている。いわば Wien がムシルの遺稿をめぐって、「並行運動」を起こしたわけである。これは、ムシルの全遺稿がこれまでローマのムシルの遺族が保管していたために、遺稿の研究が困難であったが、昨年オーストリア政府がこれを全部買いとり、Wien 国立図書館がこれを保管し、その修復と目録化に乗り出したからだと思われる。Saarbrücken の研究センター所長 Roth 女史は、この Wien のムシル研究センターについては一言も触れることなく、Saarbrücken と Wien 図書館との共同研究は確約されていると述べている。だが、国際会議に出席した西ドイツのムシル研究家たち

には、この Wien の「平行運動」には心穏やかならざるものがあり、これに対する疑念ないしさげすみが色濃く吐露されている。筆者としては公私ともに、Wien の研究センターについての情報を受けていないので、この件についてはこれ以上言及できない状態にある。両センターが協力して、一日も早く『特性のない男』の HKA の刊行をしてくれることを要望する次第である。

討論中、Arntzen や Heydebrand によって、『特性のない男』のみならず、ムシルの発表・未発表の全著述のできるだけ速やかな公刊が再三促された。はじめに書いたように、全集の第二・第三巻が絶版となつてすでに久しい。『日記』だけは近々公刊の運びとなったが、『書簡集』や『論文集』で未発表のものを含めたものの速やかな刊行が望まれる。だがこれらについては、Frisé から刊行予定のあることだけは聞き出せても、その時期は未定の状態である。これらの刊行が遅々として進まぬわけは、遺稿自体がもつ難しさ、また資金面にもよろうが、むしろ人間の問題、人間関係にもあるようで、この点歯がゆい思いである。

註

1. ムシルの遺族は二人いるが、いずれもマルタ夫人と前夫との間の子供。一人は Rom 在の Prof. Dr. Marcovaldi, 一人は Anne といい、夫とともに北米に亡命したが、死亡。現在夫の Prof. Dr. Rosenthal は Philadelphia 在。

2. Corino は妻の Albertzen とともに若いムシル研究者。現在ともに Klagenfurt の Musil-Archiv で, Dinklage の秘書役。ムシルの手紙に関しては, Broch-Musil 往復書簡を, Literatur und Kritik (Heft 54/55

1971) 誌上に発表し、また “Musil-Mann. Ein Dialog” (Neske, 1971) では、未発表の書簡を交えて、両作家の関係をこれまで以上に浮彫りにすることに成功している。

3. 1970 年、ムシル生誕 90 周年に開かれた研究センター。所長 Marie-Louise Roth 教授。同センターの「意義と意味」については、Saarbrücken 大学学報 Nr. 2/1971 を参照されたい。Roth 女史は実直なムシル研究家で、主にムシルの内的伝記を志している人である。ムシルが晩年彼の Utopismus の歯止めとして、Realismus に支えを求めたという女史の研究の一端に興味をひかれ、じつは女史のこれまでの業績をその点でまとめてこの号に発表しようとしたが果たされず、急遽 Edition の問題に鞍がえしてしまった。ムシル愛好家にはすでに旧聞に属する問題である。

4. Materialien vom internationalen Kolloquium zu Fragen der Robert-Musil-Forschung (Universitätsdruckerei Saarbrücken, 1973)。この資料集と註 3 の大学学報は、東北大の田島氏から送っていただいた。この場を借りてお礼申しあげる次第である。

5 52 章「ある夏の日のいぶき」は、ムシル未亡人マルタの言葉では、ムシルの突然の死によって、中断の章ということになっている。だが Dinklage は遺稿を研究して、この章はムシルが脳卒中で亡くなったその日の午前中、終りまで書きあげたとしている。Karl Dinklage: Musils Definition des Mannes ohne Eigenschaften und das Ende seines Romans (R Musil, Studien zu seinem Werk, Rowohlt 1970, S. 112—123) 参照。

6. Arntzen の Frisé 版に関する意見は、Uffhausen の論説 Einige Bemerkungen zur Edition einer historisch-kritischen Ausgabe von R. Musils Roman “MoE” (R Musil, Studien zu seinem Werk, Rowohlt 1970, S. 371—410) 参照。

7. Wolfdietrich Rasch: Über R. Musils Roman “MoE”, Vandenhoeck-Reihe Nr. 242—244 の S. 6 参照。

8 註 6 の Uffhausen の論説参照。

9. 註 3 の Saarbrücken 大学学報は Roth 女史が書いたものである。同学報 S. 1 参照。